



第1分科会

白井孝子 氏：東京福祉専門学校

私は、病院勤務時に、「生きる」とは何か？と考えました。病院は、「健康になりたい」という思いの人と、「死を身近に感じる場所」と感じています。

私が看護師になりたてのころに「小児病棟」に勤めていました。その時に1人の白血病の女の子に出会いました。この頃は、今と違い白血病は治らない病気と言われていました。ある日その子に、「ここはおかしい。他の子はお母さんの料理を食べたり、兄弟と遊ぶけど自分は何もできない。楽しくない。」と言われました。余命が1か月あるかわからない子供に言われて初めて、「ここはおかしい」ということに気がついたのです。

その子の「帰りたい」の一言を聞くまでは、血液の病気がある子は死ぬまで病院から出られないと、考えていましたがその一言を尊重して、皆で帰すために支援をしようと行動したのです。その結果、死ぬ間際に「楽しかった」と言ってもらえたのです。

この体験を通じて「生きがい」は、心と体が繋がっているのだということを実感し、そのためには健康であることも重要であり、病にかかって介護持ちを持つことも大切だとことを学んだのです。そのことから、病院は、死を身近に感じるところなのですが、どこで過ごしたら一番良いのかと考え、病院を辞め、在宅看護に進んだのです。在宅看護では、病院で学んだ「体を清潔にすること・食事をとること・睡眠をしっかり行うこと」と、その子から学んだこと両方を活かせると感じました。

生きがいの支援の中で、看護より介護のイメージの方が強くなってきています。介護は一見難しそうですが、生きがいを維持する中で凄く重要な意味を示しています。介護の支援は、病院や施設、家等色々な場所で行われています。また、年齢層も様々であり、健康を維持するためには医療と連携をとりながら行わなくてはけません。以上のことから看護は、生きがいを維持する中で、非常に大事な仕事であると介護福祉士の養成を行っている中で、多くの生徒が「認知症の患者や重度の患者の世話をする」とイメージをしがちですが、その人の尊厳を守りながら、その人のしたい生活を守っていくような話をしています。よく生徒に

「生きる力を感じてきなさい」と言っています。その人の生きがいやお互いの生きる力を目の当たりにするのです。しかし、この時間はずっと続くわけではなく、その時に支えてあげることも介護福祉士の仕事である、と教えています。

生きがいネットワークには色々な年代の方がいます。自分たちの年代とのみ関わるのではなく、様々な年代の方と関わるのが重要です。将来の人口の変化について、今のうちから色々なネットワーク作りを行っておかないと、関わりは狭くなってしまいます。たくさん年代と関わっていくことで、今後どんどん繋げていくのです。

今現在地域活動を行っている時に、若い子たちの笑顔や力を持ってきてもらう方がもっと発想力が広がっていくと思います。また、若い子がいると自分たちも元気をもらえるので積極的に関わることを勧めます。

私にとっての生きがいとは、学生たちに人と関わる事の重要性を伝えることと、定年まで学生の中で認知症サポーターを育成し、認知症に興味関心を持ってもらい、全国に繋げていくようにしていくことを生きがいに行っていることです。



長阿彌幹生 氏：教育文化研究所代表

「なかよし」がつくる「仲間」・「仲間」とつくる「生きがい」

ある日、妻が病に倒れ、一番上の子供精神的な疾患を患い、仕事どころではなくなりました。仕事を辞め、家族の介護をしている中でなぜ自分の家族だけこんなことに、何も悪いことをしてないのに…という気持ちがありました。そこで自分の人生振り返ってみると、仕事ばかりの日々で過労死寸前の生活であった事に気づきました。次々とプロジェクトを勤めていく仕事は面白くなく、さらには人に恨まれる。そんな多くのストレスを感じながら毎日胃が痛み、沢山の胃薬を飲む生活をしていたことに気づき、これは家族がこうなってしまったのも仕方ないと思えました。しかし、今の生活はとても楽です。なぜこうなったのかというと、「どうしたら人と仲良くできるか、どうしたら仲間と仕事ができるか」ということをずっと考えていたからです。その結果、ちょっとずつ練習していく中で楽になっていったのです。

なかよし事業の一つをご紹介しますと、いまはコミュニティビジネスです。ビジネスと名前に付いているのでみなさん避けがちですが、コミュニティビジネスは地域課題の解決事業です。地域課題を地域住民が地域資源を使って解決する事業です。地域課題というのは、ゴミの問題、子育ての問題、犯罪、高齢者、障害者、子供の遊び場、雇用の場、いろいろあるわけですが、このような問題を地元の人々が解決していくことが基本的な内容です。では、地域資源というと始めに人が挙げられますが、そんな優秀な有能な人材が地域にいるのかと思う人がいることと思います。ですが、私は、福祉学生の人材育成のセミナーを行っていましたが、どのような能力があるのか棚卸をしたところ、そうすると凄い人がたくさんいることに気づいたのです。そして調べた結果、学校の教師、看護師、中には福岡の歓楽街・中州でホステスを10年やっている人もいました。カネもモノも一緒に。見ていけばいくほど地域には眠っているものが多いのです。コミュニティビジネスの効果というのは、地域課題の解決や地域の経済が活性化し、雇用の機会が生まれ生きがいの創出につながるということです。

コミュニティビジネスに大切なのは理念です。この理念は、やる人たちが基本的価値観、目的志向を共有するということです。私たち教育文化研究所の理念は「私たちは家庭、学校、職場、地域においての対立や反目をなくし、親愛の情に満ちたなかよし社会の実現を目指します」です。2番目は情熱です。とにかく自分、周りの人のために動くということが大切です。3番目の経営力は、やっていると身に付くものだと思います。4番目はネットワークです。ネットワークを組む時に一番のポイントになってくるのは、やっぱりなかよしなのです。なかよしを阻む一番の壁は何かかというと、「自分は正しい」という思いです。これが強いと違う人の意見が聞けなくなってきました。自分とは全く反対の意見の人の話は全く聞かないということになってしまいます。

「自分は正しいと思う」と聞かれてもあまり手を挙げる人はいないと思います。しかし、「自分は正しいとは思わないが、少なくとも間違っ

ていないと思う」と聞かれたら手を挙げる人は、少し多くなるかと思えます。「自分が正しい」と思うことは決して悪いことではなく、私たちの癖です。でも大切なのは「自分が正しいと思いたがる人間だ」ということの自覚です。そういう自覚が私たちの行動を少しずつ変えていくこととなります。この自覚というものは自分を客観的に見るということになります。そうすることで相手の意見を求めるようになります。その結果、謙虚な態度でいることができます。謙虚になれると、人が寄ってきます。人が寄ってくると仲間が増えます。これがネットワークなのです。私が考えるネットワークというものは、一度結んだらずっと繋がっていくものだと思います。そういうものはなかよしが必要なのではないかなと思います。

最後にみなさんに提案したいことがあります。いま地域課題として一番の問題は、母子家庭が生活苦に陥っていることです。そこで専用住宅を設け、なかよしを作りたい人を募集しています。空きアパートを活用した「母子カプロジェクト」です。母子家庭の生活苦、子育ての悩みを解決しようというものです。

もうひとつは「出前スナック」です。艶のある人生を大切にということで、高齢者の介護施設に直接出前に行き、プロの接待を受けるものです。いくつになっても艶は大切です。年をとったからもういいやということではなく、棺桶に入るまで艶は忘れずにして欲しいです。このようなプロジェクトに関わっている人はみんなワクワクしています。その向こうにはママやチーママを待っている人もいます。生きがいとは何だろうと考えた時に、生きがいを提供する側も生きがいを持ってなくてはならないと思います。それで受ける側にも生きがいはできるのです。

